

## 校内別室における取組について

### 不登校生徒の状況

対象生徒は中学校2年生で、1年生2学期から不登校傾向となり登校が難しくなってきた。校内別室を利用するようになり、担任や校内別室指導支援員、SC、友達等と徐々にコミュニケーションが取れるようになってきた。その後、少しずつ登校日数が増え、現状は週2、3日定期的に別室登校している。

### 具体的な取組

#### ○全校生徒・保護者への周知

校内別室についてお知らせを作成し、全校生徒へ配布した。

学校ホームページにも掲載している。



#### ○生徒が安心できる空間の確保

クッションフロア、様々な机、個別のブース等を設置し、過ごしたい場所を選択できるようにしている。



#### ○別室利用カードの作成

校内別室を利用した生徒の様子をデジタル化し、いつでも全教職員で共有できるようにしている。

カード

日	姓	本名	学年	性別	年齢
1	1	1	1	1	1
学習やふたご					
に満足しています？					
😊 😐 😞 😡					

#### ○リモート授業の実施

校内別室からでも教室の授業をリモートで受けられるようになっている。



### 成果

別室は、不登校生徒だけでなく、登校していても教室に入りづらい生徒も利用していて、不登校の未然防止にも役立っている。不登校傾向のある生徒の保護者の安心感にもつながっている。

また、校内別室があることで教員の授業準備の時間が確保でき、教員の働き方改革にもつながっている。

### 課題

教員間の校内別室への共通理解を図ること、校内別室のルールを作ること、校内別室指導支援員の確保などが課題となっている。

## 別室支援の取組について

### 不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校から不登校が継続している。入学前には、小学校と情報共有を行うとともに、保護者との相談を行うなど、当該生徒への支援について検討する場を設けた。中学校入学後は、集団の生活を避け、別室登校への登校を行うことで学校とのつながりを維持・継続している。

### 具体的な取組

#### ○校内別室運営

校内別室指導支援員の協力の下、校内別室の運営を行っている。保護者の理解を得た上で、生徒の自学自習を基本とし、支援員は学習をサポートのために利用生徒と関わっている。自学のために学習の計画を立てることが生徒の自発的な行動を促している。

支援員のスケジュール管理については特別支援コーディネーターが中心となっており、ホワイトボードを用いて利用生徒に伝わるようにしている。支援員の在・不在が見える化されていることで、生徒も利用可能な時間等を把握することができるようになっている。



#### ○オンライン授業配信

I C T推進委員会を中心にオンライン学習の整備を行っている。各クラスにカメラを設置し、一人1台端末を通して授業をリアルタイムで視聴できる環境整備を進めている。集団を苦手とする生徒が落ちついた環境で学習を進めることができ、一定の効果を上げている。

#### ○校内支援委員会

毎週行われる校内支援委員会において、不登校生徒の情報共有や校内別室の環境整備についての協議を行っている。S Cにも参加してもらうことで、不登校生徒に対し、多角的な援助を進めている。

#### ○支援記録

複数の支援員が生徒の対応に当たっている。「支援記録」を回覧することで、生徒の様子や学習進度などを共有し、支援員によって異なった対応にならないようにしている。

### 成果

不登校生徒が抱える様々な悩みに向き合うとともに、生徒が学校とのつながりを維持するためのも一つとして、校内別室の設置は一定の効果을上げている。

### 課題

支援員の確保や、支援員と担任等の教員との情報共有などが課題である。

## 安心して思いを伝えられるようになるための環境づくり

### 不登校児童の状況

対象生徒は、小学校5年生の3学期から登校しづりが始まった。登校しても校門の前で立ち止まったり、家に帰ったりしていたが、校内別室支援開始後の小学校6年生の4月からは、校内別室へ登校できるようになった。中学進学へのイメージがもてるようになり、中学校情緒固定学級の体験に参加することができた。

### 具体的な取組

#### ○一日の予定を相談する時間

教室への登校に不安が強いため、校内別室へ登校してから支援員と一緒に担任のところへ行き、一日の予定を相談する時間を設けている。少しずつ自分の思いを伝えられるようになってきている。自分の気持ちを伝えることが難しいときには、具体的な言い方を支援員に教えてもらい、言葉で表現することに取り組んでいる。

#### ○SC面談

SCによる面談を週1回実施している。毎週、同じ曜日や時間に設定することで、当該生徒の心の安定につながっている。面談では、家庭での生活の様子や家族との関係、学校生活における不安や課題について取り上げ、漠然とした思いの相談を受けている。

#### ○他の児童と関わりをもつ機会

カードゲームや手芸や工作を通して、校内別室を利用する他の児童と関わりをもつ機会を設定した。他の児童との関わりが生まれ、同じ在籍学級で校内別室を利用している児童との人間関係が構築された。その児童と一緒にあれば教室で授業を受けられる時間が増えた。



#### ○関係機関との連携

当該児童は、発達的な特性があるため、中学校に進学後も、校内別室のような少人数の環境を希望していることから、担任より情緒固定学級の利用を提案し、医療機関の受診につながった。

### 成果

校内別室で話を聞いてもらえる環境が整い登校に対する気持ちが前向きになった。在籍学級との関わりを継続することで、授業や給食、委員会に参加することができるようになった。それを周囲から評価されることで自己肯定感を高める一助となっている。

### 課題

教職員との連携ができる支援員の人材確保や、支援員と教職員が限られた時間の中で情報共有や引き継ぎをすること。